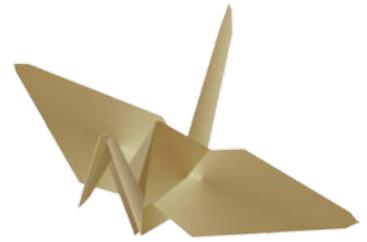


平成28年度

平和大使長崎派遣事業報告書



千の願いを乗せて  
伝え続けよう 平和の尊さ



松 戸 市

## 目 次

平和大使長崎派遣事業にあたって	1
世界平和都市宣言	2
平和大使長崎派遣募集	3
平和大使名簿	5
平和大使長崎派遣行程	6
平和大使長崎派遣帰庁報告会	16
平和大使の報告	17
「長崎派遣で学んだこと・考えたこと」	梶原 望音 18
「皆の願いを一人の行動で」	新井 しほり 20
「長崎に行って」	山本 遥香 22
「平和大使長崎派遣報告書」	大住 春紀 23
「私にできること」	塙 悠莉乃 25
「長崎派遣を終えて」	三橋 世那 27
「長崎で学んだこと」	山崎 夏海 29
「長崎派遣で学んだこと」	千葉 京香 31
「平和への願い 一ナガサキー」	須藤 未来 33
「長崎平和大使としての決心」	坂本 聖 36
「心に残ったこと」	相馬 結子 38
「私達が伝えていくこと」	中村 莉子 40
「長崎派遣を終えて」	水谷 寛樹 41
「平和大使として伝えていくべきこと」	工藤 翼 43
「繋ぐ」	長田 結 45
「私が伝えたい事」	吉田 香凜 47
「平和な世の中を次の世代へ」	板橋 来美 49
「平和大使の使命」	中川 和泉 51
「「平和」とは何か？」	本田 真樹 52
「平和大使長崎派遣を終えて」	羽坂 美柚 54
「本当の平和とは」	白石 優美香 56
「平和大使として考えたこと」	星名 優歩 58

新聞掲載記事	.....	60
長崎平和宣言（平成28年8月9日）	.....	61
歴代平和大使名簿	.....	69



## ～ 平和大使長崎派遣事業にあたって ～

本市は、世界平和都市宣言を行って以来、毎年様々な平和事業を展開しており、その一つとして「平和大使長崎派遣事業」を実施しております。この事業は21世紀を担う市内中学生を原爆投下の地である長崎市に「平和大使」として派遣するもので、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを学び、戦争や核兵器の無い平和な未来を築こうという心を育てていただくことを目的としております。平成20年度に始めた本事業は今年で第9回目を数え、延べ176名を平和大使に任命しました。

さて、今年の8月9日、長崎市平和公園において「被爆71周年 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」が開催され、22名の平和大使が参列しました。

式典には53の国と地域の代表と、約5,600人の参列者が集まり、原爆犠牲者の冥福を祈り黙とうを捧げました。このことから、核兵器廃絶を求める声が世界的な流れになりつつあることが感じられます。

そして、長崎市長は式典の「長崎平和宣言」の中で、日本政府に、非核三原則の法制化と、核抑止力に頼らない安全保障の枠組みである「北東アジア非核兵器地帯」の創設を検討するよう訴えました。また、国同士の信頼関係を築くためには市民一人ひとりにもできることがあり、それはオバマ米大統領を温かく迎えた広島市民の姿が表しているように、国を超えて人と交わることで言葉や文化、考え方の違いを理解し合い、身近に信頼を生み出すことだ、と私たちに呼びかけました。

被爆者の平均年齢は80歳を超え、このままでは被爆体験や戦争体験の記憶は風化してしまう恐れがあります。悲惨な記憶を決して忘れないために、そして戦争や核兵器の無い平和な未来を実現していくために、私たちは、直接体験談を聞くことができる最後の世代として真実をしっかりと引き継ぎ、若い世代に継承するということが使命であると考えております。

併せて、世界平和都市宣言における、世界の恒久平和の達成を念願するという理念から、世界各地で続く紛争に対しても目を向け、様々な角度から、広い視野を持った施策を行う必要があると認識しているところです。

本事業を通して、平和大使が長崎の地で学び感じた被爆の実相や平和の尊さを周りの人に伝え、一歩ずつでも平和な世界、平和な未来に近づくことを願い、今後も本事業を実施してまいりたいと考えております。

## ～ 世界平和都市宣言 ～

我が国は、世界で唯一の被爆国である。

何人も平和を愛し、平和への努力を続け、常に平和に暮らせるよう均しく希求しているところである。

しかし、現下の国際情勢は、緊張化の方向に進み市民に不安感を与えている。

かかる状況に鑑み、松戸市は日本国憲法の基本理念である平和精神にのっとり、平和の維持に努め、併せて非核三原則を遵守し、あらゆる核兵器の廃絶と世界の恒久平和の達成を念願し、世界平和都市をここに宣言する。

昭和60年3月4日 松戸市

### • World Peace City Declaration

[英語]

March 4, 1985

In the past, our country has experienced the sadness from an Atom Bomb explosion.

This makes our nation determined that history will not be repeated.

All of us yearn for peace, continue making an effort to create peace, and wish that we all can live in a peaceful environment in the future.

However, presently around the world, international affairs are becoming increasingly tense and cause our citizens great concern.

In response to the present turmoil across the world, Matsudo City now more than ever, willfully observe the peaceful spirit that is the fundamental philosophy of the Japanese Constitution.

We will endeavor to maintain nationwide peace, comply with the three anti-nuclear principles and possess the desire to abolish all nuclear weapons and the accomplishment of permanent peace throughout the world.

Therefore, we now declare our city as the "World Peace City".

City of Matsudo

### • 世界平和都市宣言

[中国語]

日本是世界唯一的核弹受难国。

我们热爱和平、为和平而奋斗、切望一个和平的生活环境。

但是、当今国际关系仍然紧张、市民深感忧虑。面对动荡的世界、松戸市郑重宣告本市将遵循日本国宪法基本理念、

高扬和平精神、为保障和平而尽力、坚持非核三原则、为在地球上废除所有核武器、

建立一个永久和平的世界而积极贡献力量。

## ～ 平和大使長崎派遣募集 ～

### 世界平和都市宣言事業 第9回「平和大使長崎派遣」大使募集

#### <募集要項>



松戸市では、戦争や核兵器の無い平和な未来を築こうという心を育んでもらうため、長崎市で開催される「青少年ピースフォーラム」へ参加する中学生を募集します。

#### 【 平和大使とは 】

・「平和大使」とは、松戸市の世界平和都市宣言に基づき、戦争や核兵器の悲惨さ、平和の尊さについて事前研修、派遣、事後研修を通じて知識を深め、そこで学んだことや感じたことを周りの人に語り伝えていくことが期待される人です。

#### 【 対象 】

・市内中学校に在学する生徒で、戦争や核兵器の悲惨さ、平和の尊さについて学ぶ意欲があり、裏面の日程にある事前研修、派遣、事後研修全てに参加できる人を対象とします。  
※既に平和大使に任命された方は、対象となりません。

#### 【 定員 】

・22名（申込者が定員を超える場合は抽選とします。）

引率：松戸市職員3名 ・ 添乗員1名

#### 【 費用 】

- ・市の負担 長崎への往復航空運賃、宿泊代、長崎での移動バス電車運賃、  
8/7の夕食、8/8、8/9の3食、8/10の朝食、昼食、11/13  
の昼食
- ・自己負担 事前研修、事後研修の会場（市内）までの交通費、8/7の昼食など

#### 【 申込方法 】

・参加申込用紙に必要事項を記入して、任意の封筒に入れ学校に提出してください。

#### 【 提出期限 】

・平成28年5月23日（月）までに学校へ提出

## 【 研修日程 】

### 1 事前研修

平和についてのオリエンテーションを行います。(自主学習)

- 7月 3日 (日) 9:00～12:00 結団式及び第1回オリエンテーション  
 青少年ピースフォーラム等の内容説明
- 7月24日 (日) 10:00～16:00 第2回オリエンテーション  
 戦争、原爆、平和についての自主学習
- 7月30日 (土) 10:00～12:00 第3回オリエンテーション  
 自主学習とスケジュールの確認

### 2 派遣研修

(1) 場所 : 長崎市

(2) 期間 : 8月7日(日)～8月10日(水) 3泊4日

(3) 内容 : 青少年ピースフォーラムへの参加等

〈 青少年ピースフォーラム 〉

8月9日の平和祈念式典にあわせて、全国の自治体が派遣する青少年と長崎市の青少年とが一緒に被爆の実相や平和の尊さを学習し、交流を深めることで平和意識の高揚を図ることを目的として長崎市が実施しています。主な内容として、平和祈念式典への参列、被爆体験講話、平和関連施設見学、平和学習会への参加を予定しております。

(4) 「平和大使長崎派遣」日程表

8/7(日)	松戸駅 → 羽田空港 → 長崎空港 → 長崎市内ホテル (自主学習)	
8/8(月)	午前	平和案内人のガイドによる被爆建造物見学 〈 場所:原爆落下中心地公園、城山小学校など 〉
	14:00～15:00	開会行事(被爆体験講話など) 〈 場所:平和会館ホール 〉
	15:10～17:00	参加型平和学習(屋内) 〈 場所:平和会館ホール 〉→原爆資料館見学
8/9(火)	午前	平和祈念式典への参列 〈 場所:平和公園 ※式典は別会場も用意されています。〉
	13:30～15:30	参加型平和学習(屋内) 〈 場所:平和会館ホール 〉
8/10(水)	ホテル→ 長崎空港→ 羽田空港→ 市役所帰庁→ 帰庁報告会→市役所解散	

### 3 事後研修

- 8月31日(水) 平和大使長崎派遣報告書(作文)の提出  
 ※提出期限 派遣研修で学んだ成果を生かし、戦争や核兵器の悲惨さや平和の大切さを伝えるため、平和大使長崎派遣報告書を作成します。
- 11月13日(日) 松戸市平和事業「平和の集い」に参加します。

～ 平和大使名簿 ～

梶原 望音	(第一中学校	1 学年)
新井 しほり	(第二中学校	2 学年)
山本 遥香	(第三中学校	2 学年)
大住 春紀	(第四中学校	1 学年)
塙 悠莉乃	(第五中学校	1 学年)
三橋 世那	(第六中学校	1 学年)
山崎 夏海	(小金中学校	2 学年)
千葉 京香	(常盤平中学校	1 学年)
須藤 未来	(小金南中学校	1 学年)
坂本 聖	(小金南中学校	2 学年)
相馬 結子	(古ヶ崎中学校	1 学年)
中村 莉子	(古ヶ崎中学校	1 学年)
水谷 寛樹	(牧野原中学校	1 学年)
工藤 冀	(根木内中学校	1 学年)
長田 結	(根木内中学校	2 学年)
吉田 香凛	(河原塚中学校	1 学年)
板橋 采美	(新松戸南中学校	1 学年)
中川 和泉	(金ヶ作中学校	1 学年)
本田 真樹	(和名ヶ谷中学校	2 学年)
羽坂 美柚	(聖徳大学附属女子中学校	2 学年)
白石 優美香	(専修大学松戸中学校	1 学年)
星名 優歩	(専修大学松戸中学校	2 学年)

## ～ 平和大使長崎派遣行程 ～

7月3日(日)

### ◆結団式・第1回オリエンテーション (市役所議会棟3階特別委員会室にて)

結団式では各学校から選ばれた平和大使22名に市長から任命証が交付され、それぞれ大使としての抱負を発表しました。

オリエンテーションでは自己紹介をするとともに事業の目的や大使の役割を確認し、青少年ピースフォーラムの説明を受けました。



〈任命証交付〉



〈平和大使長崎派遣結団式〉



〈オリエンテーション〉

7月24日（日）

◆第2回オリエンテーション（市役所別館地下1階研修室にて）

長崎派遣に向けて、先輩大使から体験談を話していただきました。現地の様子を知ること  
で、平和学習に臨む意識が高まりました。また、リーダー・サブリーダーや派遣中のルー  
ルなどの必要事項を話し合っ  
て決め、コミュニケーションを図りました。

午後はグループになり、平和について意見交換をしました。そして、グループごとにまと  
めた平和への考えを平和の木「ピースツリー」に乗せて表現しました。

※ピースツリーは、市主催の平和パネル・ポスター展にて市民の皆様にご覧いただきました。



〈先輩大使の体験談〉



〈リーダーを中心に必要事項決定〉



〈グループワーク〉



〈ピースツリー作成〉

7月30日（土）

◆第3回オリエンテーション（市役所別館地下1階研修室にて）

長崎派遣のスケジュールと注意事項を確認した後、原爆資料館に献呈する千羽鶴を作るた  
め、各自が折った折り鶴と市民の方々が折ってくれた鶴を糸でつないでいきました。千羽鶴  
の由来である佐々木貞子さんのお話を踏まえた上で、平和への願いを込めて行いました。



〈スケジュール確認〉



〈千羽鶴作成〉

8月7日(日)

◆9:16 長崎へ出発

9時00分松戸駅に集合し、出発式を行い、家族や関係者に見送られて松戸駅を出発しました。12時30分羽田空港発の日本航空609便に搭乗し、14時20分長崎空港に到着、バスで長崎市内の宿泊ホテルへ向かい、16時00分頃ホテルに到着しました。



〈出発式〉



〈羽田空港出発ロビー〉

◆16:30 自主学習(立山防空壕見学)

ホテル到着後、徒歩で長崎県防空本部があった立山防空壕に行きました。ここでは、戦時中県知事などが警備や救護などの指揮を行っていた場所で、原爆投下時はここから国へ被害情報を伝えたそうです。その役割を管理人の方が説明してくださり防空壕内を見学しました。



〈立山防空壕〉

◆19:00 千羽鶴作成(ホテル会議室にて)

原爆資料館へ献呈するため、大使が作成した折り鶴と市民の方々からいただいた折り鶴で千羽鶴を完成させました。また、平和への思いを込めた千羽鶴に添える標語を大使皆で考え「千の願いを乗せて 伝え続けよう 平和の尊さ」に決めました。



〈千羽鶴作成〉



〈標語決定〉

8月8日(月)

◆9:00 自主学習(被爆建造物見学)

朝7時55分にホテルを出発し、路面電車に乗り、被爆建造物見学へ向かいました。

見学は2班体制で、それぞれボランティアの平和案内人によるガイドのもと、平和公園、城山小学校、原爆落下中心地を約2時間かけて歩いて巡りました。被爆体験者でもあるガイドの方が、当時の悲惨な様子を交えながらわかりやすく説明してくれました。熱心に説明を聞きながら貴重な被爆建造物を見学し、当時の状況を学びました。



〈松山町防空壕群(平和公園内)〉



〈平和祈念像(平和公園内)〉



〈少年平和像(城山小学校内)〉



〈被爆校舎(城山小学校平和祈念館)〉



〈被爆当時の地層(原爆落下中心地近く)〉



〈原爆落下中心地碑・浦上天主堂遺壁〉

◆12:30 千羽鶴献呈（原爆資料館にて）

午後は前日大使が完成させた千羽鶴と、市民の方々からいただいた千羽鶴を原爆資料館に献呈しました。



〈原爆資料館エントランスロビー〉



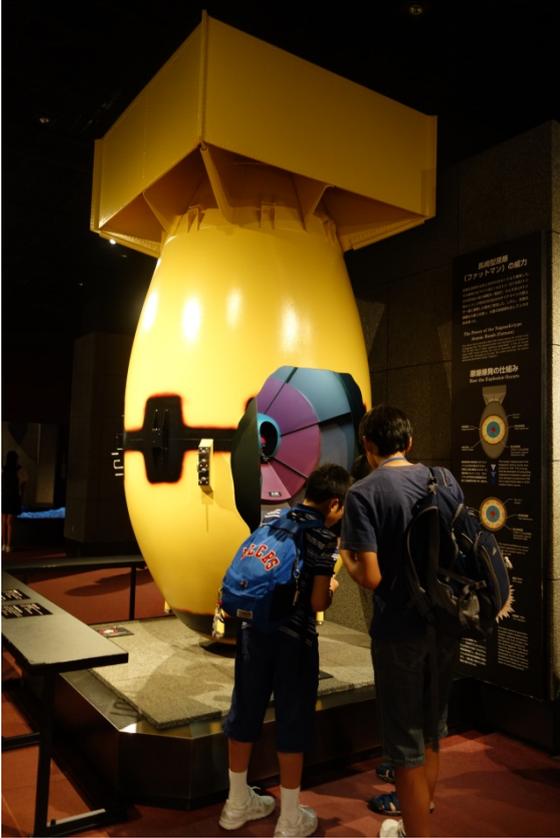
〈松戸市の千羽鶴〉



〈千羽鶴献呈〉

## ◆12:50 自主学習（原爆資料館見学）

その後、原爆資料館を見学しました。資料館には原子爆弾の実物大模型や、原爆の被害を受けた物品、被爆された方の写真など、資料がたくさん展示されており、被害の悲惨さを目の当たりにしました。



〈原子爆弾「ファットマン」の実物大模型〉



〈原爆の被害を受けた物品など〉

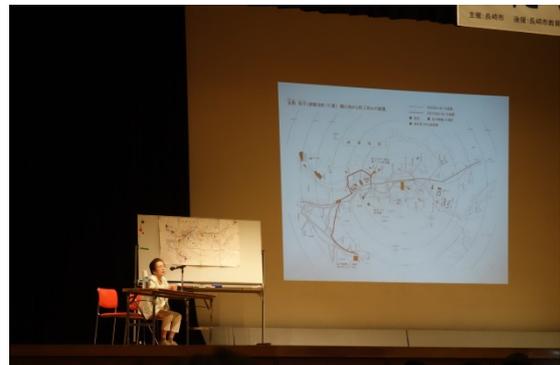


## ◆14:00 青少年ピースフォーラム（開会行事）参加 （長崎市平和会館にて）

青少年ピースフォーラムには、全国から多くの小・中・高校生が参加しました。開会行事では、地元高校生や大学生の青少年ピースボランティアによる開会宣言、長崎市長挨拶の後、永野悦子さんによる被爆体験講話を聞きました。



〈長崎市長挨拶〉



〈被爆体験講話〉

## ◆15：10 青少年ピースフォーラム（平和学習）参加 （長崎市平和会館にて）

続いて青少年ピースボランティアの進行による平和学習に移りました。参加者全員がグループ毎に分かれて、自己紹介とレクリエーションで緊張をほぐした後、スライドと紙芝居で被爆の実相を学びました。その後、原爆資料館周辺を巡るフィールドワークに参加し、1日目の青少年ピースフォーラムが終了しました。



〈自己紹介・レクリエーション〉



〈スライド〉



〈紙芝居〉



〈フィールドワーク〉

## ◆18：00 山王神社の一本柱鳥居見学

ホテルへ帰る前に、爆心地から南東約900メートルにある山王神社の一本柱鳥居を見学しました。鳥居は原爆被害を受けつつも、当時と同じ場所に立っています。片方の柱で立つ姿は、原爆のすさまじさを物語っていました。



〈山王神社の一本柱鳥居〉

ホテルに戻り夕食をとった後は、ミーティングで様々な平和学習に参加した今日一日を振り返り、各自が印象に残ったことや学んだこと、改善すべき点を述べ、明日の式典参列に向けて心構えをしました。



〈ミーティング〉

8月9日（火）

◆10:35 平和祈念式典参列（平和公園にて）

いよいよ「被爆71周年 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」参列の日を迎えました。

朝8時10分にホテルを出発し、平和公園に到着、大使たちは緊張した面持ちで会場に入りました。

厳粛な空気の中、式典が行われ、原爆投下時刻の午前11時2分、サイレンと長崎の鐘が鳴り響きました。原爆犠牲者のご冥福と世界の恒久平和を祈り、黙とうを捧げました。

被爆71周年  
長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

式次第

- 10時35分 被爆者合唱
- 10時40分 開式  
原爆死没者名奉安
- 42分 式辞（長崎市議会議長）
- 46分 献水
- 48分 献花
- 11時02分 黙とう
- 03分 長崎平和宣言（長崎市長）
- 13分 平和への誓い
- 18分 児童合唱
- 23分 来賓挨拶
- 38分 合唱 千羽鶴
- 43分 閉式



〈式典会場〉



〈平和祈念像〉



〈開式前の様子〉



〈黙とう〉

◆13:30 青少年ピースフォーラム（平和学習）参加  
 （長崎市平和会館にて）

午後は前日に引き続き、青少年ピースフォーラムに参加しました。グループとなり、前日の平和学習を踏まえて「もし自分が世界の代表だったら世界を平和にするために何をするか」や「平和が続くために何ができるか」などのテーマについて意見交換をしました。そして各々が「My 平和宣言」を作りました。

グループ発表では、大使たちは班の代表として発表するなど、積極的に取り組みました。

2日間の青少年ピースフォーラムを通じて、全国から集まった同年代の参加者と交流ができ、大変貴重な体験となりました。



〈意見交換〉



〈発表〉



〈代表者へ修了証書授与〉



〈参加者集合写真〉

世界平和祈念行事実行委員会（事務局：長崎市被爆継承課）が開催した「平成28年度世界平和祈念ポスター・標語展」への応募者のうち、嬉しいことに2名の大使が、標語部門・中学の部で、努力賞を受賞しました。2名には会長である長崎市長から賞状が送られました。その大使と標語を紹介します。

常盤平中学校 1年 千葉 京香  
 「忘れてはいけない 過去のあやまち  
 つくりだそう 平和な未来」

根木内中学校 2年 長田 結  
 「その願い 平和をつくる ワンピース」



〈千葉〉



〈長田〉

### ◆17:00 自由学習（出島、グラバー園見学）

青少年ピースフォーラムを終え、自由学習に向かいました。約200年間の鎖国時代、世界に開かれた唯一の貿易の窓口であった出島を見学し、長崎の歴史と文化に触れました。

夕食後はグラバー園を散策しました。そこから見た長崎の夜景は美しく、大使たちの良い思い出となりました。



〈出島〉



〈グラバー園〉

8月10日（水）

### ◆8:00 松戸へ出発

4日間お世話になったホテルの方にあいさつし、バスで長崎空港へ向かいました。

10時15分長崎空港発の日本航空608便に搭乗し、長崎を後にしました。飛行機の中では帰庁報告会に向けて準備をしました。

12時00分羽田空港到着。市の迎いのバスで、市役所へ向かいました。



〈長崎空港出発ロビー〉

### ◆14:30 松戸市役所到着

スムーズに松戸市役所に到着。皆、元気で帰ってくることができました。

帰庁報告会が始まる前に、大使一人一人に青少年ピースフォーラムの修了証書が渡されました。



〈修了証書授与〉

## ～ 平和大使長崎派遣帰庁報告会 ～

### ◆15:00 帰庁報告会（市役所議会棟3階特別委員会室にて）

市長をはじめ、出迎えてくれた家族に、長崎で見て、聞いて、体験したこと、また派遣を通して新たに感じた平和への思いなどを一人一人報告し、4日間の派遣日程を終えました。



〈帰庁報告、市長の言葉〉



〈青少年ピースフォーラム修了証書を手集合写真〉

# 平和大使の報告



## 『長崎派遣で学んだこと・考えたこと』

第一中学校 1年 梶原 望音

私は、今回の長崎派遣帰庁報告会で言ったように、改めて「平和」が大切だと思った。それを実感したのは被爆者の永野さんのお話を聞いたときだ。

永野さんは原爆で妹と弟を亡くしていた。その話を聞いたとき、私はあることを考えた。原爆を落とされたのは戦争があったから。戦争が起こったのは日本を含め戦争に参加した国々が平和ではなかったからではないかと。もし、71年前、日本が平和だったのなら、戦争には少なくとも日本は参加しなかったはずだ。そうなる、広島、長崎には原爆は落とされない。そして、被爆者の方々は苦しまなくてすんだはずだ。そう考えると、今戦争に参加していない日本に住むことができることがどれだけありがたいことかと思う。だから、日本に住んでいることに感謝しながら生きていきたいと思う。

また、戦争・原爆の悲惨さについてもよく考えさせられた。それを一番実感したのは旧城山小学校に行ったときだ。私は旧城山小学校が真っ黒になっていたのも、すごくおどろいた。なぜなら、旧城山小学校に行くまでは、原爆の悲惨さを人から聞いたり資料やテレビや本で見たりしたことしかなかったからだ。今までは原爆の悲惨さを深く考えたことがなかった。でも、祈念館の中を見て、なぜ今まで深く考えなかったのだろうと後悔した。祈念館の中には原爆で亡くなった教員の方々、児童の名前が書いてあった。教員の中には今でいう高校生、大学生の人たちと同じくらいの年の方々がたくさんいた。今では考えられないことだったので、とてもおどろいた。それと同時になぜこの人たちが亡くならなければならないのだろうとも思った。今の私より小さい人もたくさん亡くなったことも知った。

私は、平和大使になれてよかったと思う。平和大使にならないと、こんな貴重な体験はできなかったと思う。なので、この長崎派遣で学んだことをたくさんの人に伝えていきたいと思う。そして、長崎派遣で学んだことをこれからの生活のなかで活かしていき、少しでも「平和」になることをしていきたい。私の四日間で学んだことに対する目標は「平和な社会への貢献を少しでもする」だ。この目標を達成できるようにしていきたい。

『皆の願いを一人の行動で』

第二中学校 2年 新井 しほり

今現在、多くの人が平和を願っている、と言うことを私は長崎の地に立ち知った。

私はこの度「平和大使長崎派遣」に参加させていただいた。この平和事業を通して、私の平和への思いや考えが大きく変わった。長崎に行く前のオリエンテーションで、平和とは何か、というのを聞かれ、皆で考えたのは日常生活についてだった。この「日常生活」というフレーズは行った後も変わらなかった。しかし、戦争の悲惨さ、平和の大切さなどを改めて多く知れたことで、とても深い内容のものになった。なぜ深い内容のものになったのかというと長崎に着いて見学した被爆建造物が核兵器の恐ろしさを物語っていたからだ。今も残されている被爆建造物を見た時に感じたものは、とても複雑な思いで、教科書や本などでは学べない、見ただけで戦争当時の様子が想像できるものだと思えた。被爆建造物の中の一つである城山小学校。今は新しい校舎と被爆当時のままの校舎が立ち並んでいて、新しい校舎は普通に授業を行っている。被爆当時の校舎は、平和祈念館となっていて一つの校舎が戦争の悲惨さを語っていた。こうして残すことによって平和というものを大切にしていると思った。

また、私が一番平和について考えさせられたのは、ピースフォーラムで聞いた、被爆者永野さんのお話。永野さんは悪くないのに、戦争で亡くした弟さんや妹さんの事を後悔していた。この話を聞いて、戦争は何も関係の無い人まで巻きこみ、体と心に大きな傷を負わせる残酷なものだと思った。他にも、長崎に行って感じたものは沢山ある。そして、行った場所全てに共通点があった。それは、千羽鶴と水があったことだ。この意味は亡くなった人へのご冥福を祈っていることと多くの人が

平和を祈っているということだ。現在、多くの人が平和を願っている。その願いを叶えるのは私達の世代だと思う。私は今回、平和の大切さ、戦争の悲惨さを深く知ることができた。だからこそ、その学んだ事を自分自身が多くの人に語り継いでいきたい。

皆の願いは一人の行動で少しでも叶うと思うから。

## 『長崎に行って』

第三中学校 2年 山本 遥香

私は長崎に行ったことで、色々な地域の人々の平和の考え方や戦争や核兵器があることの怖さを知ることができました。

平和について学んでいくなかで印象に残ったことがピースフォーラムでの意見交換です。ピースフォーラムでは北海道から沖縄県まで全国の人達の意見を聞きました。福島県から来た人は放射能の恐ろしさ、怖さを知っていたし、沖縄県から来た人は沖縄戦のことに詳しく、戦争の悲惨さを知っていました。他の県の人達の意見も一人一人違って様々な考えに触れることができました。全く同じ意見は一つもありませんでした。でも全員が平和な世界になってほしい、核や戦争のない世界になってほしい、と同じ思いを持っていました。

そして、核や戦争のない平和な世界にするためにはどうすればいいのか、ということも考えることができました。今まで戦争のことや平和のことは国の偉い人達が決めるから私達には何も出来ないと思っていました。でも、語り部の方の「まず、隣の人と仲良くしていきましょう。近くの人と仲の良い輪を作りましょう。その輪を少しずつ大きくしてみてください。その輪が世界中の人とつながれば世界中の人が一つの輪になります。」という話を聞いて、私は自分にも平和のためにできることがあるのだということに気づきました。それはとてもうれしかったです。そして何でこのことに気づけなかったのだろう、と思いました。

この平和大使長崎派遣で知った多くの人々の意見を、色々な人に伝えていきたいし、この考えを聞いてくれた人が自分の中で平和について考えてほしいです。そして、その人達を通して、別の人へと伝えていき、大きな輪を作っていきたいです。



## 『平和大使長崎派遣報告書』

第四中学校 1年 大住 春紀

僕は、今回の平和大使長崎派遣で、被爆者の方の語り部を聞き、平和祈念式典に参列するなど沢山平和について学びました。その中で平和大使として感じたことを挙げます。

一つ目は、戦争は全く関係のない人達の「あたりまえ」の生活と笑顔を奪っていくものだということです。お話を伺った永野さんも、弟と妹を長崎に連れ戻してしまっただけなのに二人が原爆で死んでしまい、自分を責めています。戦争が無ければこんなことにはならなかったでしょう。戦争はしてはいけないと言われてきましたが改めて戦争はあってはならないと強く思いました。

二つ目に感じたことは、核兵器の恐ろしさです。原爆資料館で被爆したビンをさわりましたが、硬いはずのビンがねじれ、熱線のすさまじさが伝わってきました。また、原爆投下直後の写真を見ました。以前街だった場所は、一面焼け野原になっていました。人々の生活は核兵器によって一瞬で壊されたのです。広島、長崎でこのような惨事があったにもかかわらず、なぜ世界からは核兵器が無くならないのでしょうか。これには核兵器の恐ろしさをより多くの人に知ってもらわなくてはなりません。多くの人に、そして世界のリーダーに被爆地に来てもらうことが大切だと思います。僕も長崎に行って初めて、戦争や核の恐ろしさを肌で感じました。オバマ大統領も広島に来たから、核先制不使用に動き出したのだと思います。

世界からは未だに戦争が絶えません。その戦争をどのようにしたら無くすことができるのでしょうか。それにはお互いに理解し合うことが大切だと思います。

よく聞く例を挙げます。日本人がアメリカ人に、原爆を落としたことについて責めると“Remember Pearl Harbor”と言う答えが返ってくることもあるそうです。これはお互いに事実を見失っている証です。日本は宣戦布告をせずに攻撃しました。アメリカは原爆を落とさないでも戦争を終わらせることができたのに、原爆を落とし多くの不幸を生み出しました。これらの事実を知れば行き違いも減るでしょう。お互いの事実を知ることが、平和への一歩だと信じます。

僕は長崎に行ったことで、平和について以前よりも深く考えるようになりました。特に僕達の平和は誰かの不幸の上に成り立っているのではないかということです。例えば米軍基地問題で苦しんでいる沖縄の人々や、僕達の服を作るために安い賃金で働かされているアジアの人々などです。僕達にとってはいつもの生活が平和ですが、その一方で不幸になる人もいるということを考えていなければなりません。僕はこれからも沢山のことを知り、学び、考えていきたいと思っています。

## 『私にできること』

### 第五中学校 1年 塙 悠莉乃

この度、平和大使として被爆地である長崎を訪れ、原子爆弾による被害の大きさ、平和の尊さ、そして何よりも核兵器は一つも存在してはいけないことを学びました。そのような中、先日、国連で「核廃絶に賛成か、反対か」という議案が示されました。私は当然、我が国は賛成なのだろうと思ったのですが、次の事実を目を疑いました。日本は、被爆国であるにもかかわらず、賛同の意を示さなかったのです。核の恐ろしさを最も知っているはずの日本なのに、いつまでも核の傘の下に居ても良いのでしょうか。核兵器は今すぐにでも無くすべきではないのでしょうか。政治の難しいかけ引きはよくわかりません。しかし、唯一の被爆国である日本だからこそ、声を大にして核廃絶を訴えるべきだと、私はそう考えます。そう単純に考えられる程、長崎で見聞きした内容は悲惨なものでした。原爆が投下されると、一瞬にして半径4キロメートルの市内約3分の1の家屋が全焼し、爆心地は3,000度以上にもなったそうです。原爆資料館には当時のすさまじさを伝える品々や写真があり、目を覆いたくなる程でした。いつもどおりの日常があっという間に消失してしまったのです。被爆された方々の苦しみを想像するだけでも胸が痛くなります。また、運良く助かった方々もその後数十年間様々な形で苦しんでこられたのです。実際にお話をうかがった永野さんは、ご自身に身体的な被害はないものの、ご家族を失った悲しみや後悔をずっと抱え、苦しんでこられたそうです。しかし、71年経った今でも癒えることのない悲しみを思うと、戦争のもたらす負の遺産の恐ろしさを感じます。

小学校の高学年になった頃から、8月15日が近づくと毎年両親から広島、長崎

旅行を提案されてきたのですが、小学生だった私は恐ろしさから毎回拒否し続けてきました。テレビやインターネットで十分に知ることができるというのが表向きの言い訳でした。しかし、今回の派遣でそれが十分でないことを知りました。「百聞は一見に如かず」とは正にこのことで、想像では補えないものがあったのです。それは心に訴えかけてくるものの大きさでした。とはいえ、全ての人が私と同じ体験ができる訳ではありません。ならば、私にできることはこの体験を語り継ぐことです。今後、できるだけ多くの人々に伝えていこうと思います。

このような惨劇を二度と起こさないためには何をしていけば良いか、私は「助け合い」「譲り合い」「認め合い」の気持ちが大切だと考えます。「平和」へと導くこととしては些細なことかもしれませんが、こういう小さなことの積み重ねが重要なのではないのでしょうか。個々の小さな平和への願いが、やがては地球を包み込む程の大きな想いとなり、平和へとつながることを心から願います。

## 『長崎派遣を終えて』

第六中学校 1年 三橋 世那

今回、僕達は長崎平和大使として、長崎県を訪れ、戦争の恐ろしさや平和の大切さについて学びました。長崎県を訪れる前は長崎と原爆との関連性についてイメージを持つことができませんでした。原爆資料館で、落とされた原爆・ファットマンの実物大を見たり、原爆を落とされて半分か割れてなくなっている大きな鳥居を実際に見たりしたことにより、原爆の恐ろしさについて、具体的に知ることができました。様々な場所で様々な体験をした中で心に残ったことを紹介します。

まず一つ目は、世界中でたくさんの核が保有され続けているという事実を知ったことです。平和祈念式典は、71年経った今も、盛大に行われ、被爆者だけでなく全国、全世界からメディアや一般の人など、とてもたくさんの人が集まっていました。このことは平和への強い思いの表れだと思います。しかし、世界では膨大な被害をもたらす核を今もたくさんの国が保有しているという事実があります。そのことに衝撃を受けました。とても多くの人が平和を願っているのに核がこの世界に有り続けることに違和感を覚えました。

もう一つ心に残ったことは、被爆者・永野さんの話です。永野さんは、原爆が落とされる少し前、自分の弟と妹を祖父母宅から自宅へ連れてきていました。その直後、原爆が落とされたことにより弟と妹が亡くなり永野さんだけ生き残りました。永野さんはこのことに対して71年経った今も悔やみ続けています。僕は永野さんがとても可哀想に思いました。永野さんは何も悪くないのに原爆を落とされたことで、弟と妹を失っただけでなく、長い間自分のせいにして生きてき

たことを知り胸が痛みました。戦争は終わっても、終わらない悲しみがあります。だから「もう絶対に戦争は起こしてはいけない」ということを、戦争や原爆から目を背けている人や、これから生まれてくる子達にも十分に伝えていくことが大切だと感じました。

## 『長崎で学んだこと』

小金中学校 2年 山崎 夏海

私が平和大使として、長崎へ行き学んだことは、当たり前のことのできる日常の大切さです。原爆が投下された後、家族を失い生活に苦しんだ人達がたくさんいました。だから当たり前のことを当たり前でできる今は、平和なのだと思います。

長崎へ行き、印象に残ったことは主に三つあります。

一つ目は、核兵器の恐ろしさです。

日本に落とされた二発の原爆で約21万人が死んでしまいました。また、放射能により今も苦しんでいる人がいることを知りました。

世界中にある核兵器を全て使って戦争をすれば、この地球は一瞬で消えてしまうのです。核兵器撲滅を目指して自分にできることをやろうと思いました。

二つ目は、平和の尊さです。

世界には、今でも苦しんでいる人がたくさんいます。その中でも日本は、自分のやりたいことができるので、平和だと思いました。生きているだけでも幸せなのだ改めて感じました。

三つ目は、平和のために自分ができることです。語り部の方の話の中で「戦争をすれば必ず大事な人を亡くしてしまうから戦争をしてはいけない。」という言葉がありました。戦争をしたら誰かが悲しむのではなく、それぞれ自分が悲しい目に合うことを考えさせられました。そして、周りの人と仲良くすることで身近な「戦争」をなくせると思いました。国で考えたら「隣の国と仲良く」を連鎖していけば、世界から戦争がなくなると思いました。

私が世界平和のためにできることは、身近なことを言葉で解決することです。悪いことを謝ることだけでもできると思いました。武力や暴力で解決することだけは、絶対にいけないと思います。

長崎へ行ったことを原点として、世界平和のために活動しようと思いました。長崎では私の知らないことをたくさん学べたので良かったです。

## 『長崎派遣で学んだこと』

常盤平中学校 1年 千葉 京香

私は今年の夏休みに、平和大使として長崎県に行きました。

初めに、私が一番印象に残ったことは、原爆資料館に行った事です。資料館にはたくさんの展示がされています。例えば、長崎に投下された原子爆弾、ファットマンの模型です。私よりも大きくて、3メートルくらいの大きさでした。最初はとても大きいと感じましたが、長崎が焼け野原になり、7万人以上の方が亡くなってしまったので、3メートルくらいの兵器がそんなに多くの人の命をうばっていったと思うと、本当にこわいと思いました。

原爆によって溶け、くっついた状態の6本のビンがありました。形が分からなくなっているビンもあり、どろどろに溶けたことが分かりました。それは原爆の熱によるものなので、原爆投下時の温度はすごいものだったと分かりました。この6本のビンは熱線によるものですが、原爆は他にも、火災、放射線、爆風などの様々な被害があります。

放射線による病気で今でも苦しんでいる人もたくさんいます。他にも、爆風によりガラスがささったあとのある作業服がありました。背中部分が穴だらけになっていて、爆風のこわさを物語っていました。

このように、原子爆弾は、恐ろしい威力を持っています。なので私は、家族や友達、たくさんの人を失う核兵器は、平和な世界にするためには、必要のないものだと思います。

次に、私が印象に残ったことは、被爆した永野さんの話です。会いたさから、疎開した妹と弟を呼び、そこで原爆にあってしまいます。原爆によって、妹と弟を亡

くしました。今でもその事を悔やみ71年間経った今でもその事を忘れる事ができず、心の傷は癒えていません。思い出すのもつらい話を、同じように苦しむ人が出ないように、戦争の悲惨さを伝えて下さっています。

それは、これからの時代を担う私達に同じような事を二度と起こしてほしくないという願いが込められていると思います。

今年、戦後71年が経ち、被爆者の方の平均年齢が80歳を超えました。戦争を知らない世代がどんどん増えていく、ということです。

私は「核兵器はあってはならない」「戦争は絶対にしてはならない」ということ、そして、長崎で私が学んできた事を伝えたいと思います。

家族、友達など、たくさんの方に平和の尊さを伝え、平和の輪をどんどん広げていきたいです。

『平和への願い ―ナガサキ―』

小金南中学校 1年 須藤 未来

16世紀にポルトガル船が来てから、南蛮貿易の拠点となり、キリスト教を広める中心としても栄え、キリシタン弾圧と鎖国政策がとられたことにより、オランダや中国との貿易港、海外文化の伝来地として発展し、日本が鎖国時代、唯一開かれた貿易、文化の拠点であった歴史ある出島、まるで異国に来たかのように錯覚するような建造物が建ち並ぶ素敵な街並みに、本当に、あの恐ろしい原子爆弾が投下されたのかと、自分の目を疑うような美しい光景が広がるこの長崎に、この夏、平和大使として派遣させていただきました。

平和大使任命証をいただき、事前学習を経ていたものの「戦争」「原子爆弾投下」という現実を受け入れられるのか、不安な気持ちでした。一日目は、長崎へ移動し、立山防空壕を見学し、二日目は、平和案内人さんによるガイドのもと、平和公園、城山小学校、原爆中心地、原爆資料館にみんなの平和への願いをこめた千羽鶴を献納、見学し、二日間にわたって開かれる青少年ピースフォーラムへ参加し、被爆体験講話を受け、三日目は、被爆71周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典への参列、青少年ピースフォーラムに参加し、全国から集まった小学生、中学生、高校生と平和学習を通じて意見交換を行い、その後、出島、大浦天主堂、グラバー園を見学し、四日目は、松戸へ移動し、帰庁報告会というスケジュールの四日間でした。

1945年8月9日午前11時2分、一発の原子爆弾が投下されたあの恐ろしい瞬間が、この歴史ある長崎の美しい街や、多くの人々の大切な命を一瞬にして奪いました。猛烈な爆風と熱線が襲いかかり、性別、年齢、宗教、思想、国籍に

関係なく無差別に人間を壊し、原子爆弾から放たれた放射線は、人々の体を貫き、辛うじて生き残った人たちを、今も苦しめ続けています。原子爆弾投下時、約24万人の市民のうち、約7万4千人もの命が奪われ、約7万5千人の人々が傷つけられました。平成28年8月9日現在「172,230人」もの尊い命が原子爆弾によって奪われました。

この長崎で、私は「平和になるために、すべき事」について、改めて考えさせられました。長崎市長は「長崎平和宣言」の中で核兵器廃絶に向けてのさらなる取り組み、人類の未来を壊さないために、持てる限りの「英知」を結集してください、と訴えていました。原子雲の下で人間に何が起こったのかを世界中の人が実際に自分の目で見てみれば、きっと核兵器の本当の恐ろしさを肌で感じ、ひいては「平和」に一步近づくのではないかと思います。今、この瞬間も、世界中では争いが起こっています。武器と武器との衝突で解決しようとするのではなく、対話をし、互いに思いやる心と、不満を生まないためにも世界中が協力し、人々が夢や希望を持ち、安心して暮らしていける生活の基盤を作り続けていかなければいけないと思います。

城山小学校平和祈念館にある石碑に、三つの願いが書かれてありました。「一、大きな希望。二、広い心。三、深い愛。」この石碑は、小学校へ通う子供たちの生活の中にあります。この願いが、世界中の人々の共通の願いとなって、平和への一步を世界中で踏み出していければと、私も願います。

青少年ピースフォーラムでは、全国から集まった人たちと、平和について意見交換をしました。様々な年齢の人たちの考えや思いをお互いに話し合い、グループごとに意見をまとめ、発表しました。意見を出し合い、話し合う事で、相手の考えや思いを知ることができます。世界中の人々が、お互いに考えや思いを話し合い、思いやりの心を持って接する事で、対立する事をなくしていけるのではな

いかと感じました。きちんと考えや思いを、相手に伝える事は、とても大切だと思います。不信感を生まなければ、戦争は起こらない、戦争が起こらなければ、核兵器は生まれなかった、当たり前が一瞬にして奪われた長崎の方々の受けた苦しみや悲しみ、思いは、絶対に風化させることなく、伝え、訴え続けていかなければいけないと、長崎へ行き、実際に自分の目で見て、肌で感じ、心に強く思いました。

今回、長崎へ派遣させていただき、改めて「戦争」「原子爆弾」「平和」について深く考えました。戦争を知らない私達が、真実をしっかりと後世に伝え、訴え続け、核兵器や武器ではなく、世界中の人たちが、相手を思いやる心とお互いの考えや思いを伝え合い、信頼の関係を築いていかなければいけないと思います。

戦争も原子爆弾も何も知らない私たちを温かく迎えてくださった長崎の方々、表情暗く涙をこらえて辛く悲しい体験を話してくださった平和案内人の草野さん、四日間支えてくださった松戸市の職員の方々、一緒に長崎で学んだ方々、長崎へ行く事になった時に背中を押してくださった担任の先生、部活の顧問の先生、いつも見守ってくれる家族、長崎へ行く機会を与えてくださった全ての方々に感謝しています。ありがとうございました。あの時、原子雲の下で起こった、たくさんの悲しい出来事を風化させることなく伝え、訴え続けている長崎の方々の心と共に、私自身もあり続けたいと思います。

そして、今まで以上に伝えていく機会が増えていくことを心から願います。



## 『長崎平和大使としての決心』

小金南中学校 2年 坂本 聖

1945年8月9日、午前11時2分、快晴の長崎市松山町にアメリカ軍から一発の原子爆弾が投下されました。これは、広島（8月6日投下）に次ぎ、二度目の投下です。空から死神が舞い降り、日本は一変し、世界で唯一の被爆国となりました。原爆投下から71年経過した現在も、体や心の後遺症に苦しんでいる人々が多数いる事を、今回の長崎への派遣で改めて知り、想像以上に衝撃を受けました。僕が、長崎平和大使に応募した理由は『『原子爆弾』とはどのようなものなのか？なぜ日本に落とされたのか？原爆を落とされた長崎の街がどのように復興したのか？』それらを自分の目で見て、耳で聞き、実際に知りたかったからです。

青少年ピースフォーラムでは「戦争」という大きなテーマの中で全国から集まった中学生・高校生と意見交換を行いました。「平和とは、日常のなんでもない生活を送れる事ではないか？」という意見が多数でした。僕は水を飲めない苦しさが分かりません。空腹も知りません。焼けただれた肌の痛さも知りません。僕達の世代は幸せです。長崎を訪れて心から深く感じました。

8月9日に行われた長崎平和祈念式典に僕達22名は参加させて頂きました。長崎市の田上富久市長の長崎平和宣言の中で「被爆者の平均年齢は80歳を超えました。世界が『被爆者のいない時代』を迎える日が少しずつ近づいています。戦争が生んだ被爆の体験をどう受け継いでいくかが問題です。」僕はその言葉が心に深く残りました。今年の5月にバラク・オバマ大統領が、アメリカ大統領として初めて、原爆が投下された広島を訪問し、その際のスピーチでも「いつの日か証言する被爆者の声が私たちの元に届かなくなるでしょう。しかし、その記憶を決して薄れさせ

てはなりません。」と田上市長と同様の事を懸念されておりました。式典後のピースフォーラムでは、被爆者である語り部の永野さんの話を聞き、弟と妹が原爆で亡くなったのは、自分が長崎に連れて帰ったことが原因だという自責の念に長い年月苦しんでいました。自分の辛い体験を「語り部」として日本の未来を担う僕達のような若い世代に伝え、戦争のない平和な世界であることを永野さんは願っています。原爆のことを風化させずに永野さんの話を聞いた僕達が、今回の長崎での経験を多くの同世代の人達に伝え、平和に対しての強い心を持ち続けることが平和大使として長崎に派遣させて頂いた僕の義務であると改めて思いました。世界の状況を把握すること。それについて疑問を持つこと。更に新聞を読み勉強することも今後の目標としていきたいです。

最後に、貴重な体験学習をさせて頂き見聞が広まりました。心から感謝しています。平和大使に携わって下さった関係者の方々、本当にお世話になり、ありがとうございました。

## 『心に残ったこと』

古ヶ崎中学校 1年 相馬 結子

私は実際に長崎へ行き、たくさんのことを学べてとても良い経験になりました。青少年ピースフォーラムや平和祈念式典などにも参加し、より平和への関心が高まりました。その他にも原爆資料館や、実際に原爆の被害を受けた城山小学校、平和公園なども見学し、たくさんのことを学びました。

その中でも特に印象に残ったことは、青少年ピースフォーラムで経験したことです。この行事は二日間にわたって行われました。

実際に原爆の被害を受けた方の話では当時の詳しい話などを聞き、原爆はみんなの普通の生活からなにまで、全てを奪い去ってしまうものなのだと思います。

話を聞いているうちに「なぜこのようなおそろしいものが作られてしまったのか」「どうして人の命までも奪ってしまうようなことが起きてしまったのか」などという考えが浮かんできました。しかし当時の人達は、その考えが浮かばなかったためにこんなに恐ろしいものに手を出してしまったのではないかと思いました。なので、このようなことが二度と起こらないようにするためにも、自分達が長崎で学んだことを多くの人に伝えていかなければいけないと、改めて感じました。

そして実際に被害を受けた方の話などを聞いて、全国から集まった人達と意見交換もしました。私は初めて会った人と話すことが苦手でしたが、この貴重な経験を通して、少しですが克服することができました。そして、この行事でたくさんの友達や仲間ができたので、とても良い経験になりました。

この他にも、とても印象に残ったことが三つあります。

一つ目は、原爆資料館で当時のままの時計や写真、家具などを自分の目で確かめ

られたことです。資料館の写真に自分が写っているという案内人さんからは、さらに詳しい話も聞けて、とても印象に残りました。

二つ目は、実際に被害を受けた城山小学校を見学したことです。被害を受けながらも、わずかに残った校舎の一部を資料館とし、当時の写真や話などがたくさん飾られていました。校舎の横には原爆の被害を受け、かたむいてしまっている木がそのまま残っていて、そのときの様子が目に浮かぶようでした。

三つ目は、実際に平和祈念式典に出席し、国の要人たちの話を直接聞いたことです。長崎市長さんの話や、総理大臣の話なども聞けて、とても貴重な体験を与えられました。

帰ってきてからの帰庁報告会では、長崎で学んだたくさんのことを市長さんや保護者の前で発表することができ、この派遣に参加して本当によかったと思いました。そして、自分が学んできた多くのことをたくさん人に語り継げたらいいなと思いました。

『私達が伝えていくこと』

古ヶ崎中学校 1年 中村 莉子

私が長崎に着いて思ったことは綺麗な街、ということでした。路面電車や人が街の中を行き交い、音の絶え間ない明るくて穏やかで美しい街。本当に71年前の8月9日に原爆の被害を受けた街なのか信じられませんでした。

そんな街が1分間、静けさに包まれる時があります。8月9日の午前11時2分からの予想以上に短い時間。この1分間の間、平和祈念式典の会場には一切の余計な音は無くなって私達の願いだけが式典の会場内を行き交います。

「戦争が二度と起きませんように」

「世界中に平和が訪れるように」

「戦没者の方や被爆者の方が安らかでありますように」

などといった私達の平和への願い。そして「戦争によって失った沢山の尊いもの、戦争の悲惨さを忘れてはならない」ということを教えてくれています。11時2分からの予想以上に短い時間。しかし、この1分間は私達に戦争を経験した方の言葉くらい大切なことを教えてくれました。その場に居たからこそ感じる事ができた、現地へ行ったからこそ学べたことを周りの人達には言葉で説明したいと強くその時に思いました。



## 『長崎派遣を終えて』

牧野原中学校 1年 水谷 寛樹

今回の長崎派遣では、被爆者の方から話を聞いたり、ピースフォーラムへの参加や防空壕の見学をしたりと、とても貴重な体験をすることができました。

その中でも、特に僕の心に残っているのは、永野さんの語り部です。永野さんには大変仲の良い弟と妹が居て、空襲をさけるために鹿児島県の親戚宅に避難していました。永野さんは、離れて暮らす寂しさから鹿児島県に会いに行き、半ば強引に汽車に乗せ長崎に連れ帰ってしまいました。そして長崎に原爆が投下されたことで、永野さんの弟と妹は亡くなってしまいました。永野さんは「あの時連れて帰らなければ……。守ってあげられれば」と、今でもその罪の意識に苦しんでおられました。

過去の辛い思いを人に語るのは辛いのに、語り、伝えて下さることを本当にありがたいと思いました。

私は戦争とは怖くて悲惨だということは知っています。しかし、本当の意味では理解していなかったことを、長崎に行ったことによって気づかされました。直接お話を伺い自分の目で見て考えることで、戦争のおそろしさを具体的に理解することができました。これはインターネットや本などでは、とても考えられないと思います。情報化社会である今、スマートフォンやタブレットがあれば情報は得られます。しかし、本当の理解はできないと思います。一番おそろしいのは「わかったつもりになっていること」だと実感しました。

この夏、平和の祭典であるリオオリンピックが開催され、世界が熱狂している時でさえ、地球のどこかで紛争やテロにより、小さい子どもたちが命を落として

います。今、中学生の僕にできることは、とても微力です。しかし、平和大使として学んだことを大切にして、平和とは何かを、もっと深く考えて行きたいと思いました。

そして、平和につながる今すぐできることは、身近な人と仲良くすることです。人に対する思いやりの気持ちがあれば、戦争はおきません。

小さなことですが、自分の話す言葉や人に対する態度に気をつけることで、平和の輪がつながるのではないのでしょうか。平和大使の使命を果たすのはこれからです。長崎で学んだことを伝えるためにも、まずは自分から、平和というものを考えていきたいと思います。

## 『平和大使として伝えていくべきこと』

根木内中学校 1年 工藤 翼

僕には、平和大使として「平和」を伝えていくという任務がある。8月9日、長崎平和祈念式典に参列した。平和への誓いを聞いて、71年前の今日どのようなことが起こったかを考えると心が苦しくなった。今年の5月オバマ大統領が広島を訪問し、核兵器を減らす努力をしようと言っていた。国のリーダーの人は僕たちより、みんなに与える影響は大きいので、オバマ大統領のように、核兵器を減らす努力をしてほしいと思う。また「武力で平和は守れない」と被爆者代表の井原さんはおっしゃっていた。そして、ピースフォーラムで被爆の体験談をお話してくれた永野さんは「まずは、隣の人と仲良くならなければ平和にはならない」とおっしゃっていた。僕は、この話を聞いて、被爆者の方々は皆「平和」を求めていると強く感じた。

さらに、数々の被爆の傷跡を見学し、僕は、これが原爆という物の恐ろしさなのかと改めて実感することができた。たった一つの原子爆弾によって、大切な人、今まで当たり前にあった物、これからの生活までもが一瞬にしてなくなってしまうと思うと、被爆者はどれだけつらかったか。「平和」はどれだけ大切かを実感することができた。

僕は、今回の派遣を通して「平和」とはどのようにすれば作れるのかを考えるとともに、核兵器廃絶や戦争をなくすことがいかに大切かを学べた。また、同じ人間なのに、他の動物のように仲良くできないのかが不思議に思える。だが、これからの未来は、宗教や民族、国による境をなくし、世界中の人々で国際的な問題を解決しなければならない。そのためにも、永野さんがおっしゃっていた「まずは、隣の人と仲良くなる」ということを始めに、そこから「平和」という輪を広げていかな

ければいけないと思う。

僕たち、平和大使は自分たちだけが「平和」に向かって努力するのではなく、いろいろな人に「平和」を伝え、皆で被爆者たちの思いを次の世代へと語り継いでいかなければ、これからの未来に「平和」は訪れないと思う。

## 『繋ぐ』

根木内中学校 2年 長田 結

私は、平和大使長崎派遣でとても有意義な時間を過ごすことができました。中学校の椅子に座って、ただ教科書を読むこととは、訳が違いました。戦争の悲惨さを自分の目、耳で確かめることができたのです。

特に、被爆者の永野悦子さんから直接お話をうかがえたことは貴重な体験でした。永野さんは「自分のわがままで、鹿児島に疎開していた弟と妹を無理矢理連れ戻してしまった。そのせいで、二人とも死んでしまった。」と、後悔していました。しかし、悪いのは永野さんではありません。悪いのは戦争です。原爆で、大切な人を何人も失ってしまった悲しみから、自殺してしまった人も少なくありません。それでも中には、後悔の念や大きな悲しみを抱きながらも、一生懸命、生きている人たちがいます。そのような人たちにとって、生きることは原爆に対抗することだそうです。語り部の方たちは、当時の辛い体験を思い出してまで私たちに戦争の悲惨さと平和の大切さを語ってくださいます。それは、戦争のない平和な世界をつくるためです。

平和とは、大切な人がそばにいて笑いあえること、あたりまえの日常を過ごせることです。「平和のためにまず、隣の人と仲良くしてください。」と、永野さんはおっしゃっていました。平和の輪は、どんどん大きく広がっていきます。そして、いつかは世界を包みこみます。長崎へ行ったことで、私の中でぼんやりとしていた平和の像がはっきりとしたものになりました。平和な世界をつくることは難しいかもしれませんが、平和のために私たち一人ひとりにできることは簡単です。

戦争をしたい人なんていません。しかし、いずれ、戦争の恐ろしさは忘れられてしまうでしょう。そのようなことにならないためにも、私たちは伝えていかなければなりません。私たちは、何のために学ぶのか。その答えは、過去の過ちを知り、世界を平和にするための知識と力を身につけるためだと、気づくことができました。学ぶとは、過去からのメッセージを受け取り、それについて自分で考えることです。それを次の世代へ繋ぐことが私たちの義務だと思います。

## 『私が伝えたい事』

河原塚中学校 1年 吉田 香凜

私は、中一の夏に松戸市の平和大使として被爆地の長崎を初めて訪れました。坂が多く気温も高かったですが、とても素敵な町でした。こんな素敵な町に、71年前、原子爆弾が落とされたなんて想像が出来ませんでした。

今回応募するきっかけになったのは、ひいおばあちゃんから戦争の話をよく聞いたり、毎年夏に戦争のテレビやアニメを見たりして少し関心があり、平和の尊さ、本当の平和とは何か深く学びたいと思ったからです。

長崎では、青少年ピースフォーラムの被爆者体験講話で直接話しを伺ったり、平和祈念式典に参列したり、原爆資料館で悲惨なものをたくさん目にしました。私の心は、衝撃と恐ろしさでとても耐えられなくて、目を背けたくなる事もたくさんありましたが、71年前現実に起こった事をしっかり心に受け止め、改めて戦争は二度としてはいけない事だと、強く思いました。

今私には、家族、友達がいて、大好きな部活も出来てとても幸せな毎日を送っています。でもそれは、あたりまえの事ではありません。

この平和な日常を、ずっと続けられるようにするには、どうすれば良いか？子どもの私達には何も出来ないと思っている人も多いと思いますが、まずは一人一人が優しい気持ちを持ち、両どなりにいる人と仲良くする事から始めてください。そうすれば日本中、ひいては世界中が平和に暮らせると思います。

今はまだ世界には、核兵器が約15,350発もあります。次第に少なくなりつつありますが、一日も早く核兵器のない平和な地球を作るために、今回学んだ事を活かし被爆者の方と一緒に、平和の尊さ、大切さを自分の友達や周りの人達に沢山

伝えるのが私の役割です。

被爆者の方がこう話していました。

「百聞は一見にしかず」。

機会がありましたら、直接見て自分の心で感じ取ってもらい、平和の輪と一緒に  
つなげていきましょう。

今回貴重な体験をさせていただき、とても勉強になりました。平和大使長崎派遣  
と一緒にいった仲間、携わったたくさんの方々ありがとうございました。

## 『平和な世の中を次の世代へ』

新松戸南中学校 1年 板橋 来美

平和な世の中とは……。戦争の悲惨さとは……。その答えは、全て長崎に詰まっていた。

現地では、何もかも見える光景が『立体の教科書』のように感じました。特に、私が印象に残ったこと、それは平和公園にある像です。そこには、なんと、日本に原子爆弾を落としてきたアメリカから送られた像もありました。初めは、とても不思議に思ったのですが、平和について意識するのは、世界共通なのだと感じました。しかし、現在も核兵器保有国があると知り、核兵器の恐ろしさを改めて感じました。また、園内には、全国や外国からの沢山の千羽鶴がありました。ここから、世界中の人々はより良い平和を求めているのだと感じ取れました。

被爆者の永野さんは、戦後71年経った今でも、原爆によって苦しめられています。原爆投下はあんなにも一瞬の出来事なのに、それは人々の心をずっと苦しめ続けます。しかし最近、被爆者の方の高齢化が進んでおり『日本で数少ない被爆者の方』が減ってきています。つまり、このような忌まわしい日本の過去を知る機会も減ってきています。そんな中で、こうした貴重な体験をできたこと、とても嬉しく思いました。また、時間のある私達が戦争の悲惨さについて伝えていくべき立場なのだと改めて考えさせられました。

ピースフォーラムでは、私達と歳が近い人達と、様々な活動を通して、意見交換をすることができました。更に、他の人の意見を聞くだけでなく、自分の意見をしっかりと持ち、考えを深めることができました。

長崎には、目で見たと、耳で聞いたことすべてが自分の学びになるようなとこ

ろが沢山ありました。当時の建物の一部を残した資料などが多かったのも印象的で、原爆投下時の悲惨な光景が蘇ってくるように思えます。しかし、永野さんによると『未来を担う私達を一番に守りたい。』という昔の人の思いがあるからなのだそうです。次は、その思いを受け継ぐ番です。これから、少しでも多くの平和事業にたずさわっていただけたいです。

長崎派遣を終えて、平和についてより身近に考えることができました。また、三泊四日という短い間だったにも関わらず、現地で学んできたことは数えきれないほどありました。平和大使の役目は、行って終わりではありません。まさに、これからだと思います。一人でも多くの方が平和への意識を持てるよう、自分なりに平和の尊さを伝えていきます。

この派遣を通して、他の平和大使二十一名と仲良くなることができました。一人でも多くの人と関わるきっかけになり、とてもよかったです。こうした小さな出来事で平和の輪が段々と広がっていけばいいなと思います。

## 『平和大使の使命』

金ヶ作中学校 1年 中川 和泉

今年の夏、私は平和大使として、実際に長崎の地に立ち、自分の目で、耳で、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、そして平和の尊さを学ぶことができました。

青少年ピースフォーラムでの被爆者の方の語り部では、本当の平和とは何かと真剣に考えさせられました。本当の平和とは、戦争がなく、核兵器もないということだけが平和ではなく、私達が当たり前と感じる日常が続くこと。そして、私達が平和について知ることから本当の平和が始まると、この語り部を聞いて気づかされました。もう一つ、語り部を聞いて気づかされたことがあります。それは、被爆者の方々は過去のつらい経験を思い出すのも、つらくて、苦しくて、それを私達に語るのもとても勇気がいることです。それでも私達に語ってくださるのは、未来の人達を守りたい、平和な時代を生きてほしい、そして、もう原爆で人を傷つけてほしくない。そう被爆者の方々は思っているからです。私は語ってくださる方々の大切さ、そしてその立場の大変さに気づかされました。

この先の未来と平和は、私達が作っていかねばなりません。被爆された方々のため、そして私達が作っていく未来と平和のためにも、二度と戦争を起こさないことが私達の使命だと思います。そのためにも、長崎派遣で学んだことを、戦争を経験していない平和な時代しか知らない世代にしっかりと伝えていきます。

最後に、関係者の皆さま、このような貴重な体験を平和大使として経験させて下さったことを心から感謝しています。



## 『「平和」とは何か?』

和名ヶ谷中学校 2年 本田 真樹

「平和」とは何か?と聞かれても長崎へ行く前の私は曖昧な答えしか返せませんでした。なぜなら「平和」や「戦争」について深く考えたことがなかったからです。そこで「平和」について自分なりのしっかりとした考えを持ち、それを伝えられるような人になることを目標に長崎に行ってきました。今からそこで学んだことなどを報告します。

まず学んだことを報告します。私が学んだことは、戦争や核兵器の実情です。本やインターネットではたくさんの情報があります。ですが現地に行って実際に案内人さんや平和語り部さんの話を聞いたり、原爆資料館の見学をしたりでき、本やインターネットでは学びきれない深い深いところまで学習することができました。

次に気付いたこと、感じたことを報告します。今回の派遣で数えきれないくらい、本当に多くの方の考えを聞くことができました。私達松戸市の平和大使の考え、青少年ピースフォーラムでの小中高校生の方の考えや案内人さんの考え、平和語り部さんの考え、平和祈念式典では被爆された方の考え、国の代表の方の考えなどです。私が考えを知ることでできたこの方達は年齢も立場も様々です。ですがこの方達の考えには共通点があることに気付きました。それは「戦争は絶対にしてはいけない、平和が永遠に続いてほしい」と思っているという点です。また、戦争や平和に関する場所には私の想像した以上の数の千羽鶴がありました。納めた人(団体)は医療施設やボランティア団体など様々でしたが、どの鶴も一つ一つ丁寧に折られていて思いがこもっているように思えました。そして外国の方もたくさんみえていました。これと合わせても世界中に同じように「戦争は絶対にしてはいけない、平和が永遠

に続いてほしい」と思っている人が本当にとても多くいるのだなと感じました。

以上のことから今の私が導き出した「平和」についての答えは「平和とは、自由な時間がある、周りに人がいるなど現在の私達の当たり前生活ができることだ」ということです。ですがまだ「平和」について様々な視点から考える必要があると私は思っています。そのためにはもっとたくさん学び、経験し、考えなければいけないと思うので、これからも努力を続けていきたいです。

最後に、平和大使としての任務は体験していない人に伝えるまで終わりません。そして平和の輪はまず隣の人、次にその隣の人とどんどん広がっていきます。なので私はまず身近な人に伝え、そこからどんどん平和の輪が広がっていき、いつかは世界中が平和になってほしいと思います。また「戦争は絶対にしてはいけない、平和が永遠に続いてほしい」と、心から思っています。

『平和大使長崎派遣を終えて』

聖徳大学附属女子中学校 2年 羽坂 美柚

「自分の目で実際にその爪痕を見ておきたい。」という思いで私は長崎へ向かいました。しかし、私は長崎へ行ってその思いが変化しました。見ておきたいではなく、見なくてはいけないということ。そして、伝えていかななくてはいけないという使命があるのだと思いました。

この四日間で見学した場所は、当時の県知事らが本部としていた立山防空壕。戦後、平和を祈って建てられた平和公園。爆心地。原爆資料館。被爆した旧校舎がそのまま残っている城山小学校の五ヶ所でした。

二日目に行った城山小学校では、現城山小学校の横に、被爆したときのままの形で残っている旧城山小学校がありました。校舎内には、戦後書かれた城山小学校に関する資料が残っています。その中の「世界で一番悲しいクラス」という絵本では、クラスの全員が被爆し、卒業までに四人が亡くなったという話がかかれていました。悲しい事があってもそれを伝えていく姿に、私は胸をうたれました。

二日目と三日目に参加した青少年ピースフォーラムでは、年齢や学校、住んでいる所も違う方々と一緒に学び、意見交換をしました。その中でも私の印象に残っている場面は、三日目に行った、各自が「My 平和宣言」(=世界が平和になるために一番大切だと思うこと)を書く場面です。様々な人の意見の中で、自分では思いつかない意見もあり、二日間一緒に学んでも、考えていることは違うのだと気づきました。「一人一人が勇気を出して、笑顔で挨拶・会話をする。」これがMy 平和宣言です。今は顔も性別もわからない人と、インターネットを使って会話をすることができる時代です。つまり、人と会話をするのが苦手な人でも、文字を打ち込めば

会話をすることができてしまうのです。しかし、文字だけの会話ではお互いの表情も見えず、誤解を生じ、トラブルを起こしてしまうこともあります。このような時代だからこそ、勇気を出して人と人との顔を合わせ、笑顔で会話や挨拶をする。そうすれば周りも明るくなる。笑顔の人には笑顔の人が集まってくる。それが平和に近づく第一歩になることを私は願っています。

今回お話を伺った方々全員の願い。それは「二度と戦争を起こしてはいけない。」ということでした。原爆だけではなく戦争を体験した方が日本から一人もいなくなってしまう日は、一日一日近づいています。つらい体験を語ることは苦しいことですが、それでも語ってくれるのは、私達を守りたいという思いがあるからだ、私は知りました。そして、心に深くこうきざみしました。「二度と戦争を起こしてはいけない。」。

私は長崎で、被爆者の方々の魂の叫びを聞いたような気がします。

## 『本当の平和とは』

専修大学松戸中学校 1年 白石 優美香

私は、8月7日から8月10日まで長崎へ平和大使として派遣されました。長崎という地に立ってたくさんのことを学びました。その中で一番印象に残っていることは、青少年ピースフォーラムでの永野悦子さんのお話です。

永野さんは16才で被爆しました。8月9日、空襲警報が解除され、警戒警報になった後、原爆が落とされました。もし、空襲警報が解除されなかったら、もう少し命を救えたかもしれません。戦時中は、学校にいても家の近くの防空壕に逃げないといけないので、家へ帰ろうとすると、黒こげになっている人や水を欲しがっている人がたくさんいたそうです。その時ちょうど父に会って一緒に家へ帰ったのですが、家は、燃えていて妹が亡くなっていたそうです。家がなくなってしまったので、防空壕で一晩すごしました。弟を探すため、町へ行くと町は焼け野原になっていました。そして何万人もの人が亡くなっていました。そんな中、弟を見つけることができ、看病してあげたのですが、何日か経ったのち亡くなりました。永野さんの弟と妹は疎開していて鹿児島にいました。でも永野さんがどうしても会いたいということで母との約束を破り、長崎に無理やり帰らせたことで、原爆で亡くなってしまいました。弟が死んで、永野さんは、自分のせいで死んでしまったのだと今でも後悔しています。今でも自分を責めています。もし日本が戦争をしなければ、もう少し早く戦争を終わらせていれば、こんなにたくさんの方が死ぬことも、永野さんを含め被爆者の方が深く苦しめられることはなかったと思います。

平和になるにはどうすればよいか考えました。平和になるには、核兵器や武器をなくすこと、家族や命を大切にすることが大事だと思います。しかし、たとえ核兵

器や武器をなくしても、優しい心を持っていなければ、人と人の争いごとが起こってしまい、平和な世界とは言えないと思います。まず、自分たちに出来る小さなこと。それは、家族、となりにいる友達を大切に思う気持ちを持つこと。人を大切に日常に感謝する事を続けてみて下さい。小さなことかもしれませんが、一人一人の気持ちがつながり大きな平和の輪になると思います。過去は変えられないけど、未来は変えることができます。これから、私たち平和大使は世界中に平和の大切さを伝えていきます。

## 『平和大使として考えたこと』

専修大学松戸中学校 2年 星名 優歩

僕が今回の長崎平和大使として学んだことは、戦争によって投下された原子爆弾の恐ろしさと被害の大きさでした。熱線や爆風でなくなった人や物、そして放射線によって何年も苦しめられている病気などです。さらに、他にも学んだことがあります。それは、長崎の人たちの「平和」についての想いです。長崎の人たちの、戦争や原子爆弾についての特別な気持ちを、自分自身ではっきり感じました。

長崎に行き、一番記憶に残ったのは二日目の平和案内人の方の被爆建造物ガイドと、青少年ピースフォーラムでのプログラムでした。午前中は平和公園で、平和の泉や平和祈念像などを見学して、城山小学校と原爆落下中心地を案内してもらいました。

その後、青少年ピースフォーラムで当時の長崎の話しを聞いたり、原爆資料館の周辺を歩いたり、原子爆弾の恐怖が71年前に実際に被爆された方の話や写真から伝わってくる一日になりました。

さらに三日目には、長崎平和祈念式典に参列するという、とても大事な経験をしました。会場にはたくさんの遺族の方々や、さまざまところから来た同じ青少年ピースフォーラムの人たちが来ていました。式典では長崎で起きた戦争による被爆を、世界から無くそうという宣言や誓いを立てていました。他にも近くの小学校の生徒や合唱団の方たちの合唱があり、今までに亡くなった方へ捧げていました。歌詞がきれいで、感動的でした。

式典後は青少年ピースフォーラムで平和と幸せという二つのことについて全員で考えました。「マイ平和宣言」というものを発表して、みんなでメッセージを書きあ

いました。それぞれが違う言葉で、とても興味深かったです。

今回の平和大使長崎派遣では、被爆者の方々のガイドや体験談で常に「戦争や核兵器を無くしていきたい」という願いが感じられました。青少年ピースフォーラムでも、これからの平和について意見交換をしたりしました。戦争の被害や恐怖などをただ後世に伝えるだけでなく、その恐怖をこれからの世界に残さないために「平和」を意識していくことが重要だと思いました。まだ出来る事は少ないですが、これから自分に何が出来るのか考えたいです。

平成28年8月28日(日)

松戸よみうり 新聞記事(帰庁報告会)

# 平和への思い新たに

## 中学生「平和大使」を長崎に派遣

7日から10日まで市器の恐ろしさを学ぶ。市内の中学生22人で結成され、被爆者への追悼を長崎を訪れ、平和祈念フォーラムに参加し、式典などに参列。平和被爆者から体験談を聞き、尊さを再認識した。

「平和大使」は中学生を対象に、長崎市が各自自治体と呼びかけ、毎年実施しているもので、松戸市は2008年の初参加以来今年が9回目の派遣となる。

市立第五中学校1年生の鳩悠莉乃さんは、核兵器は一つも存在してはいけないのです。これは、長崎に住む人々の願いでもあります。2つめは、平和な世界にするために自分たちが生きることができ、松戸中、日中、ひいては世界中を平和にすることに努めるのです。ここに

生消えないのです。ですから、核兵器は一つも存在してはいけないのです。これは、長崎に住む人々の願いでもあります。2つめは、平和な世界にするために自分たちが生きることができ、松戸中、日中、ひいては世界中を平和にすることに努めるのです。ここに

は今も原爆症に苦しんでいます。体の被害だけでなくありません。原爆は家族や友人、子どもなど、大切な人を一瞬で奪ってしまいました。



話した。【戸田 照朗】



本郷谷市長に長崎訪問の感想を述べる参加者

次号は9月25日発行  
<http://www.matsuyomi.co.jp>  
[yomiuri@matsuyomi.co.jp](mailto:yomiuri@matsuyomi.co.jp)

## 長崎平和宣言

核兵器は人間を壊す残酷な兵器です。

1945年8月9日午前11時2分、米軍機が投下した一発の原子爆弾が、上空でさく裂した瞬間、長崎の街に猛烈な爆風と熱線が襲いかかりました。あとには、黒焦げの亡骸、全身が焼けただれた人、内臓が飛び出した人、無数のガラス片が体に刺さり苦しむ人があふれ、長崎は地獄と化しました。

原爆から放たれた放射線は人々の体を貫き、そのために引き起こされる病気や障害は、辛うじて生き残った人たちを今も苦しめています。

核兵器は人間を壊し続ける残酷な兵器なのです。

今年5月、アメリカの現職大統領として初めて、オバマ大統領が被爆地・広島を訪問しました。大統領は、その行動によって、自分の目と、耳と、心で感じることの大切さを世界に示しました。

核兵器保有国をはじめとする各国のリーダーの皆さん、そして世界中の皆さん。長崎や広島に来てください。原子雲の下で人間に何が起きたのかを知ってください。事実を知ること、それこそが核兵器のない未来を考えるスタートラインです。

今年、ジュネーブの国連欧州本部で、核軍縮交渉を前進させる法的な枠組みについて話し合う会議が開かれています。法的な議論を行う場ができたことは、大きな前進です。しかし、まもなく結果がまとめられるこの会議に、核兵器保有国は出席していません。そして、会議の中では、核兵器の抑止力に依存する国々と、核兵器禁止の交渉開始を主張する国々との対立が続いています。このままでは、核兵器廃絶への道筋を示すことができないまま、会議が閉会してしまいます。

核兵器保有国のリーダーの皆さん、今からでも遅くはありません。この会議に出席し、議論に参加してください。

国連、各国政府及び国会、NGOを含む市民社会に訴えます。核兵器廃絶に向けて、法的な議論を行う場を決して絶やしてはなりません。今年秋の国連総会で、核兵器のない世界の実現に向けた法的な枠組みに関する協議と交渉の場を設けてください。そして、人類社会の一員として、解決策を見出す努力を続けてください。

核兵器保有国では、より高性能の核兵器に置き換える計画が進行中です。このままでは核兵器のない世界の実現がさらに遠のいてしまいます。

今こそ、人類の未来を壊さないために、持てる限りの「英知」を結集してください。

日本政府は、核兵器廃絶を訴えながらも、一方では核抑止力に依存する立場をとっています。この矛盾を超える方法として、非核三原則の法制化とともに、核抑止力に頼らない安全保障の枠組みである「北東アジア非核兵器地帯」の創設を検討してください。核兵器の非人道性をよく知る唯一の戦争被爆国として、非核兵器地帯という人類のひとつの「英知」を行動に移すリーダーシップを発揮してください。

核兵器の歴史は、不信感の歴史です。

国同士の不信の中で、より威力のある、より遠くに飛ぶ核兵器が開発されてきました。世界には未だに1万5千発以上もの核兵器が存在し、戦争、事故、テロなどにより、使われる危険が続いています。

この流れを断ち切り、不信のサイクルを信頼のサイクルに転換するためにできることのひとつは、粘り強く信頼を生み続けることです。

我が国は日本国憲法の平和の理念に基づき、人道支援など、世界に貢献することで信頼を広げようと努力してきました。ふたたび戦争をしないために、平和国家としての道をこれからも歩み続けなければなりません。

市民社会の一員である私たち一人ひとりにも、できることがあります。国を越えて人と交わることで、言葉や文化、考え方の違いを理解し合い、身近に信頼を生み出すことです。オバマ大統領を温かく迎えた広島市民の姿もそれを表しています。市民社会の行動は、一つひとつは小さく見えても、国同士の信頼関係を築くための、強くかけがえのない礎となります。

被爆から71年がたち、被爆者の平均年齢は80歳を越えました。世界が「被爆者のいない時代」を迎える日が少しずつ近づいています。戦争、そして戦争が生んだ被爆の体験をどう受け継いでいくかが、今、問われています。

若い世代の皆さん、あなたたちが当たり前と感じる日常、例えば、お母さんの優しい手、お父さんの温かいまなざし、友だちとの会話、好きな人の笑顔…。そのすべてを奪い去ってしまうのが戦争です。

戦争体験、被爆者の体験に、ぜひ一度耳を傾けてみてください。つらい経験を語ることは苦しいことです。それでも語ってくれるのは、未来の人たちを守りたいからだということを知ってください。

長崎では、被爆者に代わって子どもや孫の世代が体験を語り伝える活動が始まっています。焼け残った城山小学校の校舎などを国の史跡として後世に残す活動も進んでいます。

若い世代の皆さん、未来のために、過去に向き合う一歩を踏み出してみませんか。

福島での原発事故から5年が経過しました。長崎は、放射能による苦しみを体験したまちとして、福島を応援し続けます。

日本政府には、今なお原爆の後遺症に苦しむ被爆者のさらなる援護の充実とともに、被爆地域の拡大をはじめとする被爆体験者の一日も早い救済を強く求めます。

原子爆弾で亡くなられた方々に心から追悼の意を捧げ、私たち長崎市民は、世界の人々とともに、核兵器廃絶と恒久平和の実現に力を尽くすことをここに宣言します。

2016（平成28年）8月9日

長崎市長 田上 富久

以下、長崎平和宣言（ことばの解説）から抜粋

### ◆オバマ大統領が被爆地・広島を訪問

---

オバマ大統領は、就任 1 期目の 2009（平成 21）年 4 月、チェコ・プラハで、核兵器を使用したことがある唯一の国としてアメリカが先頭に立ち、核兵器のない世界の平和と安全を追求する決意を明らかにしました。

そして、任期最後の年である今年 5 月 27 日、アメリカの現職大統領として初めて、被爆地・広島を訪問しました。広島平和記念資料館を視察後、原爆死没者慰霊碑前に献花を行った大統領は、「核兵器のない世界」の決意を新たにす演説を行いました。

オバマ大統領は、被爆の実相がまだ世界中に十分に知られていない中で、原爆を投下した地に立ち、被爆地で起こった悲劇を世界へ訴えました。また、演説のあと、涙ぐむ被爆者と抱ようを交わすなどの印象的な場面もありました。

今後、残りの任期中に、オバマ大統領が核軍縮に向けてどういったリーダーシップを発揮するのか、注目が集まっています。

### ◆核軍縮交渉を前進させる法的な枠組みについて話し合う会議

---

日本を含む多数の国が賛同して共同声明が作成されるなど、核兵器の非人道性（後述）への関心が世界的に高まっています。2015（平成 27）年の核不拡散条約（NPT）再検討会議では、そのような非人道兵器が二度と使用されないことがないように、核兵器の使用や保有などを禁止する法的な枠組みを作ることが必要だ、という声が多く、NPT 加盟国から出されました。

こうした流れを受け、その秋の第 70 回国連総会では、メキシコやオーストリアなどが提案した国連決議が採択され、「核軍縮交渉を前進させる法的な枠組みについて話し合う会議」を設置することが決定しました。

この会議では、核兵器の法的な枠組みの検討を含め、核軍縮を進めるための具体的な方法が話し合われます。すべての国連加盟国が参加でき、NGO などの市民社会（後述）も自由に発言できます。

2016（平成 28）年 2 月、5 月、8 月にジュネーブの国連欧州本部で会議を開き、そこでまとめた「勧告」を今年秋の第 71 回国連総会に提出する予定です。

#### 【核不拡散条約（NPT）再検討会議】

※核兵器保有国が増えることを防ぐ条約であり、核兵器の軍縮や拡散の状況を定期的に検討するために、5 年毎に再検討会議が開催されています。

## ◆核兵器の抑止力に依存する国々と、核兵器禁止の交渉開始を主張する国々

---

### (1) 核兵器の抑止力に依存する国々

相手国が攻撃してきた場合、核兵器で反撃するという姿勢を見せることによって相手国の攻撃を思いとどまらせようとするのを、核兵器の抑止力といいます。しかし、抑止力に固執すると、お互いに相手国より強力な核兵器を保有したり開発しようとしたりするために、核の拡散につながり、逆に核兵器による攻撃の危険性が高まる可能性もあります。

日本や韓国、NATO（北大西洋条約機構）の諸国は、いずれも核兵器は保有していませんが、アメリカの持つ核兵器の抑止力によって守られている国々です（「核の傘」の国々ともいわれます）。これらの国々は、核兵器禁止に直ちに向かうことに反対の立場をとっています。

これに対し、多くの国々が、核兵器の抑止力に頼らない方法で国の安全を保障しようとする考え方に立った政策をとっています。長崎市は、その現実的で具体的な方法として、北東アジア非核兵器地帯（後述）を提案しています。

### (2) 核兵器禁止の交渉開始を主張する国々

国連加盟国のほとんどは核兵器を持たない国々です。

核兵器は戦争に使われるだけでなく、存在する限り事故による誤使用やテロなどに使われる危険性があります。その危険な核兵器を法的に禁止しようとする動きが核兵器を持たない国々の間で、2010（平成 22）年頃から高まってきました。そして、そのような国々の主導のもと、三度にわたって核兵器の非人道性を考える国際会議が開催される一方で、核兵器保有国や核兵器の抑止力に依存する国々との溝は深まってきました。

このように、核軍縮が一向に進まない現状へのいら立ちから、今回の「核軍縮交渉を前進させる法的な枠組みについて話し合う会議」の中で、メキシコやオーストリアなど 100 か国を超える国々が、核兵器禁止条約の追求を求める意向を表明しています。

## ◆市民社会

---

近年、貧困、人権、環境といった地球規模の課題において、NGO（非政府組織）や NPO（非営利組織）、民間財団などの市民の組織が大きな役割を果たしており、こうした組織が公共を担う社会を「市民社会」といいます。

「市民社会」は政府や企業と並び、社会を構成する重要な要素です。政府や企業に対して情報を提供したり、活発な社会的運動を行ったりすることで、人々に関心を与え、時には国際社会に大きな影響を与えます。

核兵器の分野においても、核兵器廃絶を求める世界の 7,000 都市以上が

連携して「平和首長会議」が組織されているほか、国際会議においても市民社会の発言の機会が設けられるなど、その役割はますます重要になっています。

核兵器廃絶に向け、市民社会の取り組みが活発となる中、長崎市としても、市民社会との連携の重要性を認識しています。

## ◆非核三原則

---

非核三原則とは、核兵器を「持たない」「つぐらない」「持ち込ませない」という被爆国である日本政府の3つの原則のことです。

1967(昭和42)年12月、当時の佐藤栄作首相が国会で表明しました。1971(昭和46)年11月の衆議院で沖縄返還に関連して、初めて国の方針として、国会の意思を決める決議が行われました。

## ◆「北東アジア非核兵器地帯」

---

条約を結び、核兵器の製造、実験、取得、保有などをしないと約束した地域のことを「非核兵器地帯」といいます。この条約によって核戦争の危機を減らし、国際的な緊張をやわらげることにもつながります。地球の南半球は、1967(昭和42)年のラテン・アメリカ核兵器禁止条約のほか4つの条約(南極条約、南太平洋非核地帯条約、アフリカ非核兵器地帯条約、東南アジア非核兵器禁止条約)によって、すでに陸地のほとんどが非核化されています。

北半球でも、1998(平成10)年にモンゴルの「非核地位」が国連で認められ、2009(平成21)年には中央アジア(ウズベキスタン、タジキスタン、キルギス、トルクメニスタン、カザフスタン)非核兵器地帯条約が発効されています。

「北東アジア非核兵器地帯」とは、日本と韓国と北朝鮮の3か国を「非核兵器地帯」にしようとするものです。地帯として完成するためには、3か国に核兵器が存在せず、近隣の核保有国(アメリカ、ロシア、中国)が、3か国を核兵器で攻撃をしないと約束することが必要になります。

日本では、1971(昭和46)年に非核三原則の国会決議が行われ、また、韓国と北朝鮮による「朝鮮半島非核化共同宣言」が、1992(平成4)年に発効されるなど、それぞれの国が非核化を表明しました。

しかし、北朝鮮が2006(平成18)年10月、2009(平成21)年5月、2013(平成25)年2月に続き、2016(平成28)年1月に核実験を強行したことから、朝鮮半島の非核化の実現が困難な状況になりました。

北朝鮮の核を早急に放棄させるためにも、北東アジア非核兵器地帯の実現に向けて、日本政府や韓国政府が主導していくことが必要です。

## ◆核兵器の非人道性

---

人間にも環境にも深刻な被害を与える化学兵器や生物兵器、人を無差別に殺傷する対人地雷は、非人道的兵器として、使用を禁止する国際条約があります。

核兵器は、兵士か一般市民かを区別することなく、大量に人間を殺傷し、放射線の後障害により、長期間にわたって不必要な苦痛を与える兵器ですが、現在、国際人道法（＝殺し合いを最小限に食い止められるために決められた法律）による禁止の対象とはなっていません。

### 【後障害】

※被爆して数年から数十年してから現れる症状で、がんや白血病、白内障などがあります。放射線が年月を経て引き起こす影響については、未だ十分に解明されておらず、今も調査や研究が続けられています。

## ◆1万5千発以上もの核兵器

---

長崎に落とされた原爆は、通常火薬の約2万1,000トンの量に相当する威力があったといわれています。

一方で現代の核兵器は、その数倍から数百倍の威力を持つものまであります。

核兵器保有国が持っている核弾頭は、使用できる状態にあるもののほか、ミサイルから取り外されているものの、再び使用できるよう保管されているものも含めると、アメリカ7,000発、ロシア7,300発、イギリス215発、フランス300発、中国260発となっており、インド、パキスタン、イスラエル、北朝鮮などの推計もあわせると、世界中に1万5千発以上の核弾頭があるといわれています。

## ◆人道支援

---

人道支援とは、「緊急事態またはその直後における、人命救助、苦痛の軽減、人間の尊厳の維持及び保護のための支援」と定義されており、日本の外交の柱の一つである「人間の安全保障」を確保するための、具体的な取り組みの一つに位置付けられています。

人道支援を主な活動としている国際機関には、世界の子どもたちを守るために活動する国際児童基金（ユニセフ）、飢餓のない世界を目指す国連の食糧支援機関（WFP）、戦争や武力紛争の犠牲をしいられた人たちの保護や支援を行う赤十字国際委員会（ICRC）など、さまざまな機関があります。

日本はこれらの国際機関と連携し、財政面や人的な協力での支援を積極的に行っています。近年では、難民の生活を保護するための支援をするほか、

地震や干ばつなどで被害を受けた国々へ自衛隊を派遣したり援助物資を送ったりしています。

また、エボラ出血熱などの重大な感染症被害に対しても予防啓発や衛生環境改善などの分野で支援しています。

#### ◆城山小学校の校舎などを国の史跡として

---

2016（平成28）年6月17日、国の文化審議会から、「長崎原爆遺跡」を新たに国の史跡に指定するよう答申がありました。

「長崎原爆遺跡」は、1945（昭和20）年8月9日に長崎に投下された原子爆弾の被害を伝える遺跡として、爆心地、旧城山国民学校校舎、浦上天主堂旧鐘楼、旧長崎医科大学門柱、山王神社二の鳥居から構成されます。いずれも爆心地から800メートル以内にあるものです。

被爆遺構としては、広島市の原爆ドームに次いで史跡指定となります。

国指定の史跡になると、核兵器の被害や戦争の悲惨さを伝える遺跡として、今後は国と一緒に、保存と整備が行われます。

長崎市はこの長崎原爆遺跡を、「物言わぬ語り部」として、後世に守り続けていきます。



～ 歴代平和大使名簿 ～

年度	No.	氏名 (学校名)
平成二十年度(二〇〇八年)	1	熊川 実旺 (第四中 2年)
	2	別宮 賢治 (第五中 2年)
	3	渡邊 ちさと (六実中 3年)
	4	片野 結依 (小金南中 1年)
	5	清水 のどか (古ヶ崎中 1年)
	6	藤井 彩乃 (新松戸南中 2年)
	7	清水 健人 (金ヶ作中 1年)
	8	神部 莉奈 (新松戸北中 2年)
	9	山本 拓実 (旭町中 3年)
	10	黒木 若葉 (聖徳大学附属中 1年)
平成二十一年度(二〇〇九年)	1	川本 景介 (第一中 1年)
	2	鈴木 亜加里 (第二中 1年)
	3	小幡 祐太 (第三中 1年)
	4	山田 政明 (第四中 1年)
	5	清水 彬奈 (第五中 1年)
	6	久佐野 美奈子 (第六中 1年)
	7	増野 友梨奈 (小金中 2年)
	8	井山 陽菜 (常盤平中 2年)
	9	小林 美幸 (栗ヶ沢中 1年)
	10	熊川 大揮 (六実中 1年)
	11	高島 里夏 (牧野原中 3年)
	12	西 志穂 (河原塚中 3年)
	13	工藤 颯人 (根木内中 1年)
	14	四家 明宜 (金ヶ作中 1年)
	15	児島 一華 (和名ヶ谷中 1年)

年度	No.	氏名 (学校名)
平成二十二年度(二〇一〇年)	1	櫻井 和奏 (第一中 2年)
	2	吉田 彩乃 (第二中 1年)
	3	三橋 若奈 (第三中 1年)
	4	笹本 幸輝 (第四中 2年)
	5	比嘉 祐哉 (第五中 2年)
	6	後藤 奈穂美 (第六中 1年)
	7	神部 ちひろ (小金中 2年)
	8	田中 萌加 (常盤平中 1年)
	9	高梨 望 (栗ヶ沢中 2年)
	10	岸田 穰士 (六実中 2年)
	11	大山 祭 (小金南中 1年)
	12	渡邊 誠嗣 (古ヶ崎中 2年)
	13	梶浦 美樹 (牧野原中 2年)
	14	斉藤 温人 (根木内中 1年)
	15	富永 由也 (河原塚中 1年)
	16	石井 拓海 (新松戸南中 2年)
	17	中川 剛志 (金ヶ作中 1年)
	18	向田 美紀子 (和名ヶ谷中 3年)
	19	山本 ありさ (旭町中 2年)
	20	新倉 花菜 (小金北中 1年)
	21	田村 陽香 (聖徳大学附属女子中 2年)
	22	染谷 日向子 (専修大学松戸中 1年)



年度	No.	氏名 (学校名)
平成三十三年 度(二〇二一年)	1	佐藤 萌加 (第一中 2年)
	2	発地 空介 (第三中 1年)
	3	岸 健太 (第四中 1年)
	4	宗像 未来 (第五中 1年)
	5	天野 七海 (第六中 1年)
	6	紙崎 莉緒 (小金中 2年)
	7	井山 祥樹 (常盤平中 2年)
	8	加藤 円来 (栗ヶ沢中 1年)
	9	鈴木 理花子 (六実中 3年)
	10	坂本 実優 (小金南中 1年)
	11	谷口 茉奈美 (古ヶ崎中 1年)
	12	對馬 あい子 (牧野原中 2年)
	13	山田 真平 (河原塚中 2年)
	14	新垣 峻太 (新松戸南中 3年)
	15	水谷 春来 (金ヶ作中 2年)
	16	長谷川 結友 (旭町中 3年)
	17	板倉 日向子 (小金北中 1年)
	18	張 敏 (聖徳大学附属女子中 2年)
	19	平野 瑞帆 (専修大学松戸中 2年)

年度	No.	氏名 (学校名)
平成三十四年 度(二〇二二年)	1	阿部 秀大 (第一中 2年)
	2	茂出来 美樹 (第二中 3年)
	3	小澤 美羅 (第三中 3年)
	4	笠原 卓斗 (第四中 1年)
	5	播磨 渚生 (第五中 3年)
	6	内海 渚 (第六中 1年)
	7	大津 みちる (小金中 3年)
	8	小俣 さやか (常盤平中 1年)
	9	佐藤 優海香 (常盤平中 1年)
	10	阿部 裕美 (六実中 1年)
	11	宮本 龍一 (小金南中 3年)
	12	樋口 杏 (古ヶ崎中 1年)
	13	高橋 あみ (牧野原中 2年)
	14	遠藤 未羽 (根木内中 2年)
	15	後藤 陽 (河原塚中 1年)
	16	鈴木 里歩 (新松戸南中 2年)
	17	岩崎 いぶき (和名ヶ谷中 1年)
	18	伊藤 梢 (和名ヶ谷中 3年)
	19	紀藤 颯斗 (旭町中 1年)
	20	川村 香奈美 (小金北中 1年)
	21	石井 そら (聖徳大学附属女子中 2年)
	22	中山 皓一郎 (専修大学松戸中 1年)



年度	No.	氏名 (学校名)
平成二十五年 度(二〇一三年)	1	藍原 由梨奈 (第一中 1年)
	2	河野 圭吾 (第二中 1年)
	3	福田 友郁 (第三中 2年)
	4	旗谷 幸亮 (第四中 1年)
	5	宮島 健吾 (第五中 3年)
	6	後藤 美菜 (第六中 3年)
	7	関川 美海 (小金中 2年)
	8	金澤 春樹 (小金中 1年)
	9	阿部 雅治 (常盤平中 3年)
	10	中澤 有稀 (栗ヶ沢中 2年)
	11	加藤 一紗 (六実中 1年)
	12	島田 悠 (小金南中 1年)
	13	大久保 愛深 (古ヶ崎中 1年)
	14	緑間 喜子 (古ヶ崎中 1年)
	15	毎熊 和正 (牧野原中 2年)
	16	猪瀬 柊斗 (牧野原中 1年)
	17	奥野 智朗 (河原塚中 3年)
	18	平野 茜 (新松戸南中 1年)
	19	下藤 誉司 (和名ヶ谷中 1年)
	20	新倉 拓真 (小金北中 1年)
	21	郡司 萌 (聖徳大学附属女子中 2年)
	22	星 さりあ (専修大学松戸中 1年)

年度	No.	氏名 (学校名)
平成二十六年 度(二〇一四年)	1	布川 恭大 (第一中 2年)
	2	白井 悠生 (第二中 2年)
	3	松本 優樹 (第二中 2年)
	4	本間 宏明 (第三中 2年)
	5	旗谷 吏紗 (第四中 3年)
	6	宮島 加奈子 (第五中 1年)
	7	植田 聖杜 (第六中 2年)
	8	合田 健太郎 (小金中 2年)
	9	早崎 諒 (常盤平中 2年)
	10	小井土 瑠苒子 (栗ヶ沢中 1年)
	11	望月 優衣 (六実中 3年)
	12	片野 玲奈 (小金南中 1年)
	13	和田 晴人 (古ヶ崎中 2年)
	14	對馬 悠介 (牧野原中 2年)
	15	井手 麟太郎 (根木内中 2年)
	16	樋口 明日香 (河原塚中 1年)
	17	斎藤 龍秀 (新松戸南中 1年)
	18	久保田 美咲 (和名ヶ谷中 2年)
	19	紀藤 菜桜 (旭町中 1年)
	20	渡邊 龍 (小金北中 1年)
	21	野中 利悦 (聖徳大学附属女子中 2年)
	22	築田 真理子 (専修大学松戸中 3年)



年度	No.	氏名 (学校名)
平成二十七年(二〇一五年)	1	服部 叶汰 (第一中 1年)
	2	瀬谷 恭平 (第二中 2年)
	3	長谷川 勇矢 (第三中 2年)
	4	朝生 蘭 (第四中 1年)
	5	田島 歩夢 (第四中 3年)
	6	佐藤 駿太 (第五中 1年)
	7	小林 優人 (第六中 2年)
	8	山下 優月 (第六中 2年)
	9	田崎 和 (常盤平中 1年)
	10	須藤 巧 (小金南中 1年)
	11	萩原 真央 (小金南中 1年)
	12	大久保 敦康 (古ヶ崎中 1年)
	13	倉重 はるか (古ヶ崎中 2年)
	14	清水 智也 (牧野原中 2年)
	15	木村 史来 (牧野原中 1年)
	16	吉田 真帆 (河原塚中 1年)
	17	飯銅 千尋 (和名ヶ谷中 2年)
	18	井上 未来 (旭町中 2年)
	19	島岡 里帆 (小金北中 1年)
	20	藤井 友紀 (聖徳大学附属女子中 2年)
	21	山田 佳那 (聖徳大学附属女子中 2年)
	22	福島 有香 (専修大学松戸中 3年)





平成28年度  
平和大使長崎派遣事業報告書  
～千の願いを乗せて  
伝え続けよう 平和の尊さ～

松戸市  
総務部総務課

平成28年12月発行